ヘーゲルの論理學に於ける存在、本質、概念の聯關を中心として（完）

船山信一

九

ひとびとの言ふ樣に、主觀と客觀、思惟と存在、概念と實在態との關係を如何に考へるかといふことは、あらゆる哲學の特性を最も鮮に浮き立たせる所以であらう。然らばヘーゲルその人は此の問題に對して如何に答へたであらうか。然しヘーゲルは此の問題を單純に提出して居るのではない。彼は此の問題を樣々な觀點から取り上げ、そしてそれらの觀點の原理的な聯關を明にして置いた。『精神の現象學』に於ける知とその對象との關係、『精神の現象學』全體又は意識の經驗と『論理學』全體又は論理的理念との關係、論理的理念と自然や精神との關係、『精神哲學』に於ける概念と實在態との關係、歷史に於ける理念とその現はれとの關係、これらすべての問題はかの問題の一般的見地の下に於て理解されることが出來る。わけても、主觀と客

觀との關係の樣なものは、その原理的同一性にもかゝはらず、常にそれぞれの土地にふさはしく規定されねばならぬ。然し今の我々の關心は此の問題に關してももつぱら論理學の內に限られて居る。たとへ我々の究極の目標は論理學を自己の外にあるものによつて規定されたものとして見ることにあるにしても、我々はその緒を論理學の中から引き出すことが出來るのでなければならない。その限りに於て、上にのべた問題は、こゝでは、客觀的論理學と主觀的論理學との關係の問題と、主觀的概念又は主觀性と客觀又は客觀性との關係の問題との二つに限定されることが出來よう。先にあげた諸問題はこゝにあげた問題が解決されて後に始めて正しく答へられることが出來る。而も、我々の行論が今こゝで我々に與へた課題は、特に、主觀性と客觀性との關係を明にすることである。客觀的論理學と主觀的論理學との關係の問題は、今は唯その問題の解明に役立つ限りに於てのみ、再問されよう。そしてその際には我々は勿論、對比のために、「存在」と「本質」との關係に對しても再び一瞥を與へねばならぬであらう。のみならず、主觀的概念と客觀との關係は、一方に於ては概念そのものに於ける普遍性・特殊性・個別性の關係に對し、そして他方に於ては「存在」や「本質」の領域に於ける關係の仕方に對して對比させられて、一層明瞭に理解せられるで

あらう。

ヘーゲルは主觀性から客觀性を、思惟から存在を、概念から實在性を、導出し、發出せしめたと言はれて居る。なるほど、もし我々が單純に、そして特に直接に、ヘーゲルの論理學に於ける主觀性と客觀性との位置づけに眼を向けるならば、しか考へられもするであらう。然し我々は此の場合に於ても、ヘーゲルが一定の範疇をどこに置いたかといふことと共に、そこに置かれて居る範疇は如何なるものであるかを問ふことを怠つてはならぬ。さうすると我々は、ヘーゲルに於ける主觀性と客觀性、並びに此の二つのものの聯關は、決して、普通に考へられて居るものとは同一でないことを見出さねばならぬであらう。主觀性に就いては我々が既に論ずるところがあつた。ヘーゲルの言ふ概念は、決して、いはゆる主觀的なもの、又は同樣にいはゆる形式的なものでなくして、實體の眞實態として、却つて、ものの內的本性であり、ものの魂である。ひとびとは、通常の意味に於ける主觀的なものは論理學に於てはどこにも自分の場所をもつて居らず、既に遙か以前に拭ひ去られて居ることを想起すべきである。論理學に於ける主觀性とは、いはゆる客觀的なものの眞實態であるやうな主觀であり、更に獨立的に實存する概念そのものである。從つてひとは又「概念」論に於ける客觀

性とはかゝる概念の眞實態であることを、それに就いて論議する前に銘記して置くべきである。主觀性からの客觀性の導出といふことが言はれ得るにしても、それは、かゝる主觀性からのかゝる導出であり、かゝる客觀性の導出であることが忘れられてはならぬ。ヘーゲルの論理學に於ての主觀的概念の客觀への發展を正しく理解するためには、我々はそれに先立つて、客觀的論理學――『存在』論・『本質』論――が主觀的論理學――概念論――に先行して居ることを、はつきりと頭に入れて置かねばならぬ。そして此の事は本質的に、『精神の現象學』が『論理學』に先行して居ること――然し此の先行は後者の前者に對する本質的優先を傷つけるものではなく、却つてそのための前提であり、又その歸結である――に基づいて居る。ヘーゲルの論理學はたとへ發出論理であると假定しても、然しそれは決して主觀的なものからの客觀的なものゝ發出ではない。そして此の事を理解するためには、ひとびとは先づ『精神の現象學』に於ける出發の仕方を憶ひ出すべきであらう。學そのものとしての論理學に於ける端初として『純粹有』が取られたといふことは、單にそれが純粹なもの・無規定的なものであることにのみ基づいて居るのではなくして、同時に、それが正に有客觀的なものであつて、主觀的なもの・意識的なもの――經驗的なそれであれ、先驗的なそ

れであれ――でないことにも基づいて居るのである。然し一層眞實に言ふならば、ヘーゲルは論理學の出發點を純粹有――一般的には「存在」――に求めたことによつて、客觀的なもの――抽象的なものとしての――からの客觀的なもの――具體的なものとしての――の發出といふ非難をも免れて居る。彼は直接的なもの――「存在」――から出發することによつて、それを背後のものへ移行させ、それを基づけて居るもの――「本質」――へ還歸せしめることが出來た。かくて「存るもの」は「出て來たもの」として知られる。直接に直接的なものとしての「存在」は、從つて本質的には却つて媒介されたもの・措定されたものである。同樣に、反對に、直接には導き出されたもの・媒介されたものであるところの「本質」は、本質的には逆に直接的なもの――而も直接性に止まつて居るところのものではなくして、却つて措定するところの直接的なものの――である。もし端初が本質的に直接的なもの――例へばスピノーザに於ける實體の如きもの――に求められるならば、一方に於ては實體は屬性や樣態を自己の中から流出させるもの――蓋し眞實態としての直接的なものは正に自己原因であることによつて、そこに移り行くべき、從つてそこへ復歸して行くべき、それ故に又そこから出て來たところの「本質」をもたない――、從つて又それらを自己の中へ流入させ

るものとなり、他方に於ては、直接に直接的なものは全く夢幻的なものとなつてしまふであらう。ヘーゲルの論理學は發出論理や構成的論理學ではない。それはたとへ分析論理とは言へぬにしても、再構成の論理である。そして我々が今のべたと同樣のことは「本質」と「概念」、從つて客觀的論理學と主觀的論理學との關係や、主觀性と客觀性との關係に關しても言はれるであらう。然し「本質」からの「概念」への發展と「存在」からの「本質」への發展との相違、並びに「存在」論と「概念」論との間に兩者の媒介として獨立的な「本質」論を考へたといふ事――此の事の理由を說明することは、同時に、ヘーゲルの論理學の第三部が何故に特に主觀的論理學でなければならなかつたかを說明することにならう――は、歷史的に、又體系的に、そして特に事象そのものの見地からも、大きな意義と問題とを含んで居るであらう。然し私は今それに就いて論ずる力といとまとをもたぬ。それは習作的な此の論文に繰り入れられるべく餘りに大きな問題であるだらう。然し、こゝで私は、ヘーゲルが何故に發出論者として見られるかの理由の一つとして、到る處に於てさうであるやうに「存在」からの「本質」への移行に於ても亦、彼が「存在」を「本質」として見ることに急であつて「存在」の「本質」を、及び「存在」を「本質の存在」として見ることを閑却したといふことをあげておかう。彼は「存在」をもつ

ぱら「本質」へ移行するものとして見たことによつて、一方に於てはそれにも拘らず保存さるべきところの「存在」の獨立性を消滅させ、從つて他方に於ては又「本質」の獨立性をも傷つけた。かゝる意味に於て二重の流出――「本質」からの「假象」の流出と「存在」からの「本質」への流出、又はむしろ流入――が語られ得るのである。

客觀態は固より一つの直接態である。然しそれは直接態の中でも、一般的には「存在」と「本質」とから區別され、特殊的には有や定有、並びに實存や現實態から區別される。「有は一般に最初の直接態であり、定有は最初の規定性をもつた直接態である。事物と一緒の實存は根據から、卽ち本質の單純なる反省の自己を止揚する媒介から出て來る直接態である。然し現實性や實體性は、現象としての未だ非本質的なる實存と、その本質性との、止揚されたる區別から出て來る直接態である。最後に、客觀性は、概念が自己の抽象と媒介とを止揚することによつて自己をそこへ規定するところの直接態である。」「存在」一般がさうであるやうに、有や定有は單純なる直接態であるが故に、客觀態との關係に於ては左程重大な意義をもたぬ。然し、實存や現實態は媒介されたる直接態であるが故に、それらと客觀態とを比較する事は、客觀態そのものの研究に取つても重要である。客觀態は、有や定有――「存在」一般――とは異つて、單に

直接的に在るものではなくして、媒介されてあるものであるが、然し又實存や現實性の如く客觀的な根據から出て來たもの・措定されたものではなくして、主觀性から出て來たものである。ヘーゲルは「存在」の領域に於ける關係の仕方たる「移行」や「本質」の領域に於ける關係の仕方たる「反省」から區別されたものとしての「概念」の領域に於ける關係の仕方たる發展の中でも、主觀性からの客觀性へのそれを特に實在化 Realisation と呼んで居る。「或物」は「他者」へ「移行」するのであり「根據」は「實存」を「措定」するのであり「主觀性」は「客觀性」へ「實在化」されるのである。實在化は移行と反省又は措定・そして特に後者の最高の形態たる顯示 Manifestation ——絶對者の現實態への——とから如何に區別さるべきであらうか。「存在」に於ける關係は或物と他者、又は自體有と對他有の關係であり「本質」に於ける關係は自體有=對自有、然し自體有の規定に於ける自體有=對自有である。然るに「概念」に於ては自體有=對自有と自體有=對自有との關係がある。我々は既に此の樣な關係を普遍性・特殊性・個別性の間に見た。然し此の三つの契機の間には餘りに强大な同一性が支配して居て、對立性が缺けて居る。卽ち、それらは共に概念の自體有 An-Sich-Sein を形成して居るのみであつて、その現實存在 Dasein ではない。そして、かゝるものの役目を果すものが正に客觀態である。「本質は自己

の自體有に等しき自己の現實存在を自己に與へることによつて概念となる」と言はれる時、その現實存在は、最も眞實には、普遍性に對しての個別性、又は概念そのものに對しての判斷や推理ではなくして、正に、主觀性に對しての客觀性でなければならぬ。單に自體に於てあるもの又は他者ではなく、そして又單に措定されてあるものでもなくして、自體に於てと同時に措定されてあるもの、措定されてと同時に自體に於てあるものたり得るのは、客觀性である。主觀性と客觀性のみが始めて能く眞實に、相互的に、自體に於てのものと措定されてあるものとの、又は自覺的な意味に於ける措定と被措定との統一であることが出來る。そしてこれこそ自覺の最高の形態である。他者は單に對他有――或物に對してあるもの――であり、實存は單に對自有――根據に對してあるもの――である。客觀性にして始めて自體有"對自有と言はれることが出來る。

普通には、ヘーゲルは主觀性から客觀性を「導出」したと言はれて居るけれども、もし我々にして主觀性と客觀性との關係に就いて彼の說くところを跡づけるならば、我々はむしろその反對に出會はねばならぬであらう。卽ち、客觀性とは、彼に於ては、主觀的概念の最高の媒介としての推理の止揚それ自身である。その意味に於て、ヘー

ゲルに於ける思惟と存在との統一は、フォイエルバッハの指摘せる如く、思惟の内部に於ての思惟と存在との統一である。ヘーゲルが主觀性から「導出」した客觀性は思惟された實在性にすぎない。彼が「理念」とよぶところのものも、上の樣な意味に於ての主觀性と客觀性との統一態に外ならない。而して、右のことを正しく理解するためには、こゝでも亦主觀性とは何であるかを吟味することが必要である。ヘーゲルが主觀性から客觀性を導出したといふことが言はれるのは全くの無根據なことではないといふことの理由の一つは、客觀的論理學の主觀的論理學への發展そのものの中に横はつて居る。ヘーゲルの概念は何ら主觀的なものではなくして、むしろ客觀の内的本性そのものであるけれども、「本質」から概念を導き出すことは、意識から自己意識を導き出すことと同樣に、さう容易なことではない。意識からの自己意識への發展や、本質からの概念への發展には、飛躍間隙がある。そして此の事は、單に本質の非力を意味するばかりではなくして、同時に概念の非力をも意味するのである。

「觀念論」一般の誤謬は、對象が概念によつて認識されることから、從つて對象が概念的構造をもつことから、直ちに、對象が概念であることを導き出すことにあつた。此の意味に於て、デボーリンのヘーゲル批判や、ニコライ・ハルトマンのカント批判は全

く正當である。固より此の事は、我々が特に「體驗の觀念論」とよぶところのものや、いはゆる客觀的觀念論及び或意味に於ては「先驗的觀念論」については、多少割引して――然しそれぞれ別な意味に於て割引して、言はれねばならぬであらう。然し、體驗の觀念論は、たやすく認識の觀念論へ移り行く事によつて、又はそれを自己の中に含むことによつて、依然として右の非難を甘受せねばならぬ。そして、かの非難に對して自己を防衛することによつては、客觀的觀念論は自己が顚倒されたる唯物論である事を暴露せねばならぬであらうし、先驗的觀念論は經驗的實在論に、又はむしろ「觀念論と實在論との此方」に逃げ路を求めねばならぬであらう。「本質」は普遍性・特殊性・個別性の契機を自己の中に含むといふ意味に於て、概念的である。然し此の事は決して本質が概念そのものであることを意味しはしないのである。言葉の本來の意味に於ける「觀念論」は、自體に於てあるものそのもの、又は單にその認識を拒んで、我々に對してあるもの、又はその認識を固執する。これは恐らく「觀念論」の謙讓の美德とでも言はるべきものであらう。然し、一層不幸な事には「觀念論」はこゝに止まらずに、更にその僭越の惡德を發揮する。即ち「觀念論」はその上に、我々に對してあるものを自體に於てあるものの地位に据ゑることにまで進むのである。然し、眞實には、單に物

自體だけが超越的なのではない、すべての現象が同時に超越的なのである。從つて、現象の認識は同時に物自體の認識である。模寫說を單純に排斥するところの構成主義の獨斷の一つは、固より我々が對象を認識するのは單純なる模寫によつてゞはなくして構成によつてゞはあるが、然し認識が眞理であるためにはその構成そのものが又對象自身の構造に一致せねばならぬといふことを見落して居ることにある。從つて、構成主義は、たとへ認識の眞理性を基礎づけ得ても、誤謬を基礎付け得ないではないか、またはより正しく言へば眞理の確め、從つて眞理と誤謬との判別を基礎づけ得ないではないか。模寫說が非難されるのも、單に構成なき模寫によつては認識が不可能である――對象は模寫し盡されないし、又模寫だけでは不充分であるといふ二重の意味に於て(その限りに於て構成は認識に缺くべからざるものである)――といふことのためにばかりではなくして、特に模寫の立場に於ては認識が眞理であるかどうかが確められないといふことのためにである。然し構成主義も亦、一方に於ては經驗的意識の構成と意識一般の構成との一致といふことを言はねばならぬし、他方に於ては從つてその一致の確めを行ひ得ない。認識とは、物の方から言へば物自體の我々に對しての物への轉化であり、我々の方から言へば我々の表象の、又は

我々に對しての物の物自體への一致である。然しヘーゲルの言葉を借りて言へば、物と表象とのかゝる一致は、未だ知 Wissen であつて、認識 Erkennen ではない。認識とは「對象と表象との一致としての確實性 Gewissheit ——これが知である——の確證 Bewahrheitung である。そして、かゝる確證は、成果としては、知るものと知られるものとの同一性に就いての、知るものの自覺である。しかし、此の自覺を果成せしめるものは模寫でもなく構成でもなく、はたまた知ることそのことでもなくして、正に廣義に於ける實踐であらう。かゝる意味に於て「眞理の規準としての實踐」といふ概念は、潜勢的には、——そして固よりこゝでは廣義に於ける歴史に於てとは異つて我々に對してのものとして——事物認識の場合に於ても語られ得るのである。模寫說も構成說も共に認識の眞理性の認知を與へ得ない。我々は、認識の手續きに關しては構成說の正當性を認め、認識の成果に關してはいはば批判的模寫說の立場に立ち、認識のたしかめに關しては實踐なる概念を導き入れることが必要であると考へる。自己に對しての物 Ding für sich に對する物自體 Ding an sich は固より不可認識的であらう。蓋しそれはそれ自身が空虛であつて、認識さるべき何ものをもつて居ないからである。然し、我々に對してのもの Ding für uns はそれが正しいものである限り、

同時にすべてが物自體Ding an sichであり、物自體は、たとへ近似的にではあらうとも、絶えずより多く我々に對しての物に轉化して行く。我々は二つの意味に於ける物自體を混同してはならぬ。我々はさうすることによつてのみ、概念と對象との關係を正しく把捉することが出來るのである。ヘーゲルに關して言つても「本質」は「概念」としてあることによつて「本質」たることをやめるのではない。「本質」は主觀化されることによつて「概念」としてあると同時に、依然として「本質」そのものとして存在する。「本質」からの「概念」への發展に於ては「本質」は自己に於て何ものをも失はず、却つて唯何ものかを自己に加へるだけである。ヘーゲルの汎論理主義は、あらゆるものが論理的構造をもつて居ると宣言したがためにではなくして、あらゆるものが論理的なものそのものであると主張したと解される時にのみ非難さるべきである。獨立的に實存する概念ではなくして、本質の概念、而も本質の眞實態として本質そのものからは區別された限りの概念は、只、本質の反映としてのみ正しく理解さるべきである。然るにヘーゲルは、本質を主觀化することによつて、概念を實體化してしまつた。概念は本質を單に範疇としてのみならず、現實態としても自己の中へ溶しこんでしまつた。然し、概念は自己自身に止まつて居ることが出來ない、自己ならぬものに於て

安定させられなければならぬ。然るに概念の他者としての本質は既に消滅してしまつて居る。それ故に概念は自己の中から客觀を產み出さなければならないとされるのである。此の樣な意味に於て、ヘーゲルが主觀的概念から客觀を導出したと言はれるのも、一理ある事であらう。ヘーゲルを云はば善意に解釋すれば、概念からの客觀の導出はさけられるが、然しその當然の歸結として、一方に於ては、客觀は客觀そのものではなくして、思惟された客觀 gedachtes Object・主觀の媒介の止揚されたものにすぎなくなり、他方に於ては、思惟は思惟者なき思惟 Denken ohne Denkendes、從つて非思惟になつてしまふ。そして又、ヘーゲルの言ふ主觀的概念や客觀を常の意味に於て取れば、概念からの客觀の導出といふ事が言はれねばならぬ。一言で言へば、ヘーゲルは本質を餘すところなく主觀化してしまつたが爲に、又客觀を概念から導出せねばならなかつたのである。又は、さうでなければ、彼は概念の主觀性の固有の內實を否定したことにならう。ヘーゲルが例へば「すべてのものは判斷である」といふ時、その判斷は主觀的意味のものではない、單に自己意識的思惟に現れる作業ではない。それは、すべてのものが、普遍性を自己の中にもつて居る個別的事物であり、個別化されてある普遍者である事を意味するに止まる。然しかゝる事態は決して、す

べてのものは判斷的構造をもつて居るといふ風に表現さるべきであつて、すべてのものは判斷であるといふ風に表現さるべきではないであらう。少くともそれ自身が主觀として存在して居るものに關してでなくしては、上のことは言ひ過ぎである。ヘーゲルの不幸は、概念へ本質を全部的に吸收してしまつて、概念と本質との獨自性を共に曖昧なものと化したことにある。

ヘーゲルが主觀的概念の客觀への發展を神の存在の本體論的證明に比較して居るといふことは、我々に對して種々なる興味を與へるであらう。此の事は先づ第一に彼の言ふ客觀が如何に云はば淨化されたものであるかを物語つて居る。ひとは、主觀性からの客觀性への發展に於て、例へば林檎の概念の林檎そのものへの發展を理解してはならない。林檎の概念の如きものは彼に於ては單に一般的表象、又はたかだか限定された概念に外ならないのであつて、何ら概念そのものではない。同樣に、彼に於ては、林檎といふ樣な感性的經驗的事物は決して「客觀」の名に價せぬものである。かゝるものは「客觀」としてあるものではなくして、單に例へば「定有」としてあるものであらう。そしてかゝる感性的經驗的事物に關しては、ヘーゲルは、たとへそれを眞の存在とは認めなかつたにしても、敢へて『精神の現象學』をふりかへるまでも

なく實在論者であつた事は確かである。彼が主觀的論理學に客觀的論理學を先行させて居るといふ事はその一證左である。彼は論理學に於ける存在や本質の立場を直觀や表象の立場に比較して居る。その意味に於ては、客觀的論理學の立場は直接には與へられたものの立場であり、主觀性の立場はそれを構成し自分のものとする立場であり、客觀性とはかゝる構成されたる世界、反省的には主觀によつて產出されたる世界である。「本質」の世界は「存在」の世界とは違つて、組織された世界ではあるが、その構成は未だ單に自體に於てのもの、自我に取つては與へられたもの、自我に外的なものである。然し客觀性の段階に於ける構成は自我自身のものである。かゝる意味で、客觀性とはカントのいはゆる經驗界に例へられよう。「本質」の領域に於ける範疇が「概念」の領域に於て時々再現するのは、決して單なる反復ではない。そして又同時に、他方に於ては、客觀性は正に未だロゴスの領域にある事によつて精神界そのものでも自然界そのものでもなくして、それらに對して中和的なもの、それらの內面性である。客觀態は、概念に於て、そして概念に對してあるものであり、概念から出て來たものとして自己自身に於てある事象そのものである。ヘーゲルが概念から「導出」せる實在性は經驗的實在性ではない。かゝる實在性を自己の中から產み出す

といふ事は、概念に取つては光榮ではなくして恥である。「概念からの實的なものの導來は、概念が實在態を自己自身の中から產出する事であつて、固定せる、そして概念に對立せる、見出されたる實在態へ顚落する事ではない。」「概念そのものに止まつて居る認識の不完全性は、かの尤もらしき實在性を缺いて居る事の中にではなくして、概念が未だ自己の自己自身の中から產出された實在性を自己に與へない事の中にあるのである。」卽ち、概念の抽象性は、それが未だ理念へ進まない事にあるのであつて、與へられた實在性をもたないことにあるのではない。概念は、感性的經驗的實在性を自己の外に必要とすべく、そしてまた自己の中から產出すべく、餘りに富裕であり、餘りに高貴であるであらう。神の概念とはむしろ神の本質である。そしてまた、神の、又は神的なものの本質であるからこそ、神の概念は自己に實在性を而も己れにふさはしい實在性を與へ得るのであり、神の又は神的なものの本質であるからこそ、自己の現實存在を產み出さねばならぬのである。ヘーゲルが神の存在の本體論的證明を此の上もなく高く評價したといふことは、我々の大いに注意すべきことである。神の存在の本體論的證明は、神の存在を神そのものから導き出さんとするに反して、神の存在の宇宙論的證明や物理神學的證明乃至は道德神學的證明は、神の存在

を神ならぬものによつて基礎づけんとする。本體論的證明は唯神についてのみ意味があるのであつて、表象としての金と財産としての金との關係の如きに比較されてはならない。ヘーゲルに於ける主觀性の客觀性への發展は、神の存在の本體論的證明の一般化――然し明白に限定された一般化に外ならない。主觀性は只その樣な客觀性をこそ自己の中から産み出し得るのであり、只その樣な客觀性を産み出す事に滿足するのである。高貴なものに對しては唯高貴なものゝのみが實存する。

ヘーゲルが主觀性からの客觀性への發展を神の存在の本體論的證明に比較したといふことが我々に與へる所の興味の第二は、彼の言ふ實在化の形式に卽ち方法に關係する。ヘーゲルが特に「實在化」として限定したところのものは、一體どの樣な構造をもつて居るものであらうか。我々は先に「概念」の特色の一つを、方法的には「存在」に於ける媒介者の缺除――絕對的自己同一性と完全なる排他性――や「本質」に於ける自己內反省・他者への反省から區別して、媒介の契機の獨立性に見た。他者へ移行する或物は、他者に於て自己を實在化するのではない、むしろ自己を喪失するのである。積極的なものは自己を消極的なものへ反省させることによつて、單に自己の雙關者を知るにすぎず、絕對者は現實態に於て單に自己を顯にするだけである。そし

て又、普遍者は個別者に於て、自己の個別性を自覺するに止まる。普遍者と個別者との間に於ては、如何なる意味に於ても移行といふ事が語られない。從つて普遍者は個別者に於て自己を實在化するのではない。そして又、一つの個別者の他の個別者への移行も、決して實在化とは呼ばれ得ないであらう。かくて實在化とは本質的に主觀的なものの客觀化である。單なる、潜勢態の現勢態への進展は、未だ發展ではなく、まして實在化ではない。實在化とは何よりも先づ最も媒介的なる關係である。從つて、主觀的なものを媒介としてもつて居ないところの客觀的なものと客觀的なものとの關係や、客觀的なものを媒介としてもつて居ないところの主觀的なものと主觀的なものとの關係は、特に實在化と名づけられることが出來ぬ。一つの存在と他の存在との間に於ては勿論のこと、本質存在と現實存在、根據と實存、原因と結果、絶對者そのものと絶對者の顯示の間に於ても、優越的な媒介はない。前者に於ては一般に矛盾が考へられず、後者に於ては例へば實存は根據から直接に出て來るのであり、實存は常に根據を正直に表出する。根據と實存との矛盾といふことは、唯、根據相互、實存相互の矛盾を前提して間接的にのみ考へられる。そしてこれと同樣のことは、普遍者と個別者との間に就いても言はれ得よう。殘されて居るものは主觀的な

ものと客觀的なものとの關係のみである。實在化とは、絕對的自己同一性と一つのものからの他のものの流出との何れからも、最もかけ離れたものである。然るにもかゝはらず、ヘーゲルに於ける主觀性の客觀性への發展が、一方に於ては概念からの實在態の發出と考へられ、他方に於ては思惟された實在性の生成と考へられるのは何によるであらうか。ヘーゲルは主觀的概念と客觀との統一態を理念として規定して居る。その限りに於ては單に精神のみならず自然も亦、卽ちあらゆる具體的なものは理念である。蓋し、それは、存在するものは又何らかの意味に於てロゴスをもつものであり、ロゴスは又何らかの意味に於て存在するからである。然し概念と實在態との統一といふ事は種々なる意味に於て語られる。或人は、概念と實在態とがそれぞれ獨立的に實存して居て、そして兩者が對應する、といふ平行論の立場から「理念」を考へる。そして又或人々は、相互に反對的な側面からではあるが、概念又は實在態の一方を根源者と見て、他方をそれの單なる反映として理解する。そして又或人は、概念卽實在態、實在態卽概念といふ同一論の見地に於て理念を理解し、最後の人はいはゆる觀念實在論の見地を取つて、概念と實在態とを共に、同一なる全體者の部分として捉へるであらう。然しこれらの人々は凡て、概念と實在態との統一を無媒介

的に考へるといふ點に於て完全に一致する。ヘーゲルも亦、此の點に於ては、それらの思想家達の綜合以上に出ることが出來なかつたではないか。然るに我々は主觀的なものの客觀化と客觀的なものの主觀化とを考へる。固よりヘーゲルも、本質の概念への移行と、主觀的概念の客觀への移行とに於て、此の事を遂行して居る。然しヘーゲルの不幸は、此の二つのことを全く上下の關係に於て捉へて居る所にある。ヘーゲルが本質を土臺として概念を考へ、必然を土臺として自由を考へたといふことは深い意味のあることである。然し、必然性への洞察としての自由は、未だ理性的自由の直接態である。自由の眞實態實踐的自由は然し更に自由の必然態化を含まねばならぬ。そして此の事は主觀性の客觀性への實在化に於てのみ可能なことである。而してかゝる客觀態は決して「本質」の領域であることが出來ない。否、洞察される必然態も眞實には本質態ではなくして客觀態でなければならぬ。我々は、本質態と主觀態と客觀態との關係を、上下の段階として見るべきではなくして、いはば横斷的に考ふべきである。必然態は自由の必然態化であり、自由は必然態の自由化である。自由と必然との眞に辯證法的な關係はこゝで考へられる。必然態も自由も共に、單に直接的なものとしてのみではなくして、更に、相互から成果せるものとして

捉へらるべきである。ヘーゲルは主觀性內部・客觀性內部の媒介を充分に考へたが、主觀性と客觀性との媒介を充分に考へなかつた。彼が我々から見て先にのべた二律背反に陷らねばならなかつた理由の一つはこゝにある。彼の說く概念と實在態又は對象との可代置性が、唯知の立場に於てのみ理解され、行の立場に於て理解されざる限り、無媒介のそしりから自由である事が出來ない。固より彼とても我々の意味での主觀的なものと客觀的なものとの統一を、客觀性そのものや理念の段階で考へて居たでもあらう。然し、理念が結局に於て知であり、客觀性が單なる機械制・化學制・目的論である限り、前者に於ては依然として媒介が缺けて居り、後者に於ては主觀的なものは「存在する理性」の狡計の傀儡にすぎない。たとへ現實世界は神の作 Werk であるにしても、一方に於ては神は直接に手を下さずして作るのであり、他方に於ては言葉によつて作るのである。我々は主觀性と客觀性との關係乃至は理念を全く新な見地から見直すことによつて論理の新形態を築くことが出來よう(註)。「本質」の發展の完成の後に「概念」を考へ「主觀性」の發展の後に「客觀性」を考へるといふ立場では、概念と實在態との辯證法的相關發展從つて相關制約は考へられない。一方は、それ自身としてと同時に、他方を媒介として發展する。ヘーゲルに於ける實在化として

の概念と實在態との統一を一層高めるためには、兩者の間に媒介を導き入れ、それを知の立場・行の完了としての觀の立場から、行そのものの立場へ移すことだけが殘つて居るやうに見える。

(註)此の論理は我々が特に「實踐の論理」Logik der Praxis と名づけるところのものである。このものは一方に於てはいはゆる應用論理 angewandte Logik から、そして他方に於ては實踐的論理 Praktische Logik から區別される。實踐の論理と實踐的論理との區別を理解することは我々に取つて瑣細なことではない。然し私は今此の問題に立入ることが出來ぬ、從つてこゝでは唯次のことをのべることを以て滿足しよう。實踐の論理は主として實踐の構造・その本質に關係するに反し、實踐的論理は特に實踐の內容・その方法に關係する。我々は、同じく實踐を高唱するにしても、或る人は實踐を單なる運動から區別してそれの觀念的契機を高調するに反して、他の人は實踐を觀想から區別してそれの感性的契機を高調するのを知つて居る。此の事は、前者が實踐の構造を問題として居るに反して、後者が實踐の內容を問題として居ることから理解される。惟ふに、唯物論は必然的に內容主義であり、理想主義は必然的に形式主義であることは確かである。「精神作興」はもつぱ

ら物質的內容を目標として居ることをひとびとは想起するがよい。「法衣をまとへるカピタリスト」は單に人格的にのみ解せられるべきものではない。實踐一般・實踐そのものではなくして、特定の實踐・內容からの實踐が特に現代のもの・未來のものであるとするならば、眞に新しき論理は實踐の論理ではなくして、正に實踐的論理であらう。然し後者は唯前者を通してのみ發展することが出來る。

一〇

我々は以上によりて、ヘーゲルの論理學に於ける諸々の關係の仕方の區別・聯關を多少とも明にしたつもりである。後來のものは先行のものを自己の中に包み、そしてそれを越えて居る。同樣に、先なるものは自己の內的必然性に從つて後なるものへと移つて行く。發展は、そして特に實在化は、絕對的同一性・他者への移行や、自己內反省・他者への反省の、眞實態である。然しヘーゲル自身は、その客觀的觀念論のために、此の事態を特有な仕方で理解した。そして我々は、この點に關しては、ヘーゲルを一方に於ては理解し、そして他方に於ては批判したはずである。ヘーゲルの立場の特色は、ものゝ存在に關しても・ものの知に關しても、あれほどまでの媒介の高調にもかゝはらず、媒介をもつぱら消滅する契機——固より此の事は媒介の內容に關して

ではなくして、媒介そのもの・媒介の形式に關してのみ言へることではあらうが――として捉へたことである。そして此のことは、特に、主觀的なものと客觀的なものとの關係に關しては、實踐の埋沒として現れる。ヘーゲルの論理學は、我々自身の見地から讀み直されることによつて、內容的にも體系的にも全く新な光の下にもちきたらされるであらう。それ〴〵の存在はそれ〴〵特有なる論理をもつて居る。我々は此の事を、ヘーゲルに向つては、下なるものゝ上なるものに對しての獨立性として主張すべきであらう。例へば移行や反省や發展の關係に關して言へば、三つのものはひたすらに次元の高低としてのみ理解さるべきではなくして、固より竝列的にではないにしても、對等的に考へらるべきであらう。主觀性と客觀性との關係としての「實在化」は單に一方的に考へられるべきではなくして、相互的移入によつて發展するものとして理解さるべきである。然し我々が今までにのべて來た凡てのことはヘーゲルに於ける論理學の地位」の特性の必然的な歸結である。論理的理念の自然への決意の如きも此のことを忘れて解釋されてはならない。論理學が、精神の現象學に於ける最高の立場たる絕對知の立場から展開して來ること――そして、論理學が絕對的理念に於て自己を完結すること――此の二にして一なることが、ヘーゲル

の論理學の內部に於ける諸々の關係の仕方竝びにその聯關を規定して居る。論理學の端初の問題はこゝから一層具體的に規定される。ヘーゲルが精神そのものゝ在り方をも自己啓示として捉へたといふことは、彼の論理學に於ける「實在化」の範疇を我々に對して辯護する人々に對しての、我々の方からの反證とならう。ヘーゲルが絕對知に於て學そのものを考へたといふことは、彼の形而上學存在論を特に論理學として可能ならしめたのである。惟ふに、論理の歷史性とは特に論理學の歷史性として規定されることが出來よう。けだし、論理は本質的なものであつて、現實的なものではないからである。そして歷史性とは根源的には現實的なものゝ性格である。歷史性の問題を可能性・本質に關して語ることはそれ自身が非歷史的非現實的な立場である。然るに論理は論理學としてのみ現實的である。ヘーゲルの論理學の歷史性の問題が、ヘーゲルに於ける論理學の地位、竝びに論理學と精神の現象學との關係を媒介として答へられる理由がこゝにある。「我々に對してのもの」は眞實には「自體に於てのもの」の反對物ではなくして、却つてその現實化である。（完）

（一九三一・七）